

子どもの 見ているつもり？ 聞いているつもり？ 声を聴く

6

二者択一ではない 大人自身の視点と対応

愛知県碧南市
へきなんこども園園長
ユリア

子どもに何かを訊ねる時、
「どっちがいいの？」

「いいの？ いやなの？」

と、二者択一で聞いていることがよくあると思いませんか？

そこで先日、言語聴覚士の方とお話する機会に、二者択一のほかの方法を伺ってみました。

「子どもに、自分の感情（意思）を聞いて、表現してほしい時、『はい』『いいえ』のほかに、『わからない』という選択肢を入れてみてはどうでしょう」

と言われ、子どもが「はい」「いいえ」「わからない」を指し示せる、絵本のようなものを見せていただきました。

この「わからない」ということは、大人でもあることだと思います。でも、ついつい子どもに向

かっては「どっちなの？」と言ってしまうことがあります。

「わからない」ということもありですね。

園でも、家庭でも、この視点は大事なことのように思いました。

それから、遊びにキリをつけようとする時に、「イヤダー！」って言われていませんか？

私の園ではあまり「イヤダー！」と言うことを聞きません。そこで、「なんでかな～」と考えると、多分、子どもたちが遊ぶことに満足しているのではないかと思ひあたりました。

園での生活の中で、どれくらい遊びの時間が保障されているか、担任の先生に確認してみました。

1号認定で、午後3時に降園する子どもたちは、だいたい毎日5時間、遊びの時間があるということでした。

2号認定の保育園コースの子どもたちは、さらに長い遊びの時間が保障されています。

以前は、「はい、今から遊びます」「はい、遊びは終わりだから、片づけてください」といった日常でした。今思えば、とても長い時間を園で過ごすにもかかわらず、遊びの時間が充分保障されていない状況でした。

そこで、全職員で話し合い、0～5歳児の一人ひとりが十分に遊べる時間と環境を整えてきました。そして、それぞれの子どもの遊びを守る（保障する）ことに取り組みました。すると、なんと結果として、1歳児のかみつきがなくなったのでした。驚きでした。

考えてみると、もともと子どもたちは、かみたくてかんでいるわけではありませんよね。必要な量や種類の道具（玩具・遊具）が整っていない環境の中で、1歳児に「仲よく遊ばさい」ということにはとても無理があるようです。

ところで、子どもたち全体に向けた、具体的な話が「伝わらない」「伝わりづらい」と感じる

子どもたちが、どこの園にもいると思います。

「伝わらない」「伝わりづらい」と感じた時は、個別での声かけが必須となります。そして、その伝え方も具体的なやり方を伝える方法から、「○○ちゃんを見てみて」など、自分で見て、考えて動けるように促していきます。同じような言葉かけでも、「みんなを見てみて」と見る対象が抽象的になると、理解することが難しいようです。

この自分で考えて行動できるような言葉かけは、私の園では日常の中で、すべての保育者が心がけています。園のすべての子どもに対して、心がけ（原則）は同じですね。保育所保育指針などに示されていることの実践とも重なることです。

また、家では普通にお話ししているのに、園の特定の場面では話さない……、そんな状況の子どもたちがいます。「お家では話せるのに、どうして園では話さないの？」と思ってしまうのですが、対応を間違えると緘黙を強化してしまうことがあるそうです。

「場面緘黙」は、「他の状況では話しているにもかかわらず、特定の社会状況において話すことができない状態である」と定義されているそうです。

場面緘黙のある子どもへの接し方は一様ではありませんが、どうしてそうなのかと注目してしまいがちです。でも、そこにフォーカスせず、自然に接していることがよいようです。

治すとか治さないといったことが問題ではなく、「そうなのだ」と状態を丸ごと受け入れることが「はじめの一歩」だと考えています。そのうえで、何をしてあげられるかは、一人ひとりへの対応が異なるようです。専門家の知識も必要なところです。

私の園では、年度が変わり、クラスが変わり、環境が変わったけれど、○○先生がいるから安心という状況から、自分のクラスが安心といった状況が生まれているようです。

「話さなくてもいいこと」を保障されることが

大事なことで、その子がそのままの状態を認められることが重要なことのように思っています。

クラスの子どもたちも、その状態を認めただうえで、遊びに誘ったり、働きかけをしていてよい感じでした。

また先生の対応も、「○○をやりましょう」とやらせるのではなく、「楽しいよ～」と、ササッと体を動かすことを促すような動きや、共感する方向で誘ってみるようなことがよいそうです。そして、その子の「良いところ」を先生が表現していくことで、クラス全体がその子にとって居心地のよい場になっているようでした。矯正するのではなく、その子のそのままの姿を認めつつ、働きかけていきます。



① 幼児の戸外遊びの様子



② 乳児の戸外遊びの様子

*この連載は、和田秀一先生とユリア先生に隔月交替でご執筆いただきます。